

学業報告会発展研究「イギリスにおけるLGBTとメンタルヘルス

—イギリス社会史と行政システムを中心として—

高野 慎太郎

2017年度学業報告会では、「多様性のある社会をデザインする」と称して、社会デザインに関する探求を行った。プロジェクトの1つである「性の自分らしさを考える自由の会」は、報告会終了後も継続的に活動を行ってきた。本稿ではその一例として、イギリス社会とLGBTのメンタルヘルスに関する研究活動の概要を報告する。

I. 背景

本節においては、学習者たちが標記の研究を志した背景を記述する。日本においては、LGBTという言葉の流行と共に、LGBT当事者に対する様々な対応が行われてきた。LGBTトイレの設置やLGBTに関する授業の実施など、様々な立場から、様々な対応が取られている。しかし、そうした「対応のいくつかは的外れであったり、的確でないとの謗りを免れないのは、なぜなのか」。これが第一の動機である。

2017年4月からの活動のなかで、LGBT当事者が自分らしく生きるということが大変困難に晒されていることを学習者たちは認識してきた。そのうえで、そうした問題は「当事者の心の問題というよりも、そう悩まなければならない状況を作っている社会の問題なのではないか」という視点を獲得していった。では「どんな社会が良い社会なのか」という問いを手にした（第二の動機）。

「良い社会とはどんな社会か」という問いを手にした我々は、その答えを探して議論すべく、様々な勉強を始めた。LGBTに代表されるような社会の問題を扱う場合に、往々にしてその議論の参照点はいわゆる米国流のリベラリズムの伝統に偏りがちであると筆者は感じていた。そのため、我々の議論の方法としていた「熟議」（サンステーション）の発想に法り、対立軸となる議論を参照することとし、イギリス保守思想を紹介した(1)。

エドモンド・バークやマイケル・オークショットといったイギリス保守思想を紹介したが、学習者によれば、そうした思想は「社会を変えていくなれば、少しずつ安定を保って変革するべき」との思想である。一方で、イギリスは先進国の中ではごく最近まで同性愛を禁ずる法律を残していた国である。思想

と社会の現実とは、実際にはどのように切り結んでいるのか、そして、その社会成員としてのLGBT当事者はどのように生きているのか、本当のところを知りたいという動機を手にしていた。これが第三の動機である。

斯様な動機を持ち始めていた頃（2017年6月下旬）、ある勉強会で英国University of Kentに在籍の研究者トム・ペンゲリー氏と出会った。トム氏はイギリスの大学の博士課程に在籍する社会学の研究者で、日本のLGBTの現状を調査するため、日本を訪れていた。上記の内容を相談したところ、トム氏からはイギリスのLGBTに関する調査研究を始めるところだから、それに関わって色々学んだらどうかとのありがたいご提案を頂いた。この提案を奇貨として、本調査は開始した。

II. 方法

研究の方法としては、トム氏に基礎文献となる文献一覧及びその他の具体的な資料をEメールで送付してもらい、学習者は8名で資料を割り振って翻訳、検討し文章を執筆して行った。分からない部分については日本で手に入る資料を用いて補充したのに加え、トム氏にEメールで尋ねた。文献の渉猟、分析、執筆、報告書の完成・発表というプロセスを踏んだ。

III. 理論的背景

紙幅の都合で概略のみ記す。イギリスのLGBTの現状をよりリアルに知りたいという動機に対して、研究者とタグを組んで研究を行うという方法を取ったわけであるが、こうした方法論は理論的にはプロダクティブ・ラーニングの方法にあたる(2)。また、学習理論における系統重視/場の設定との対立における「場の設定」に当たる。大村はまの単元

学習論における「実の場」の設定を重視する立場であり、K. Goodman, 桑原隆による Whole Language Approach における学習の authenticity を重視する立場に連なる(3)。また、人の生き方と社会との連関を分析し、より多様な人の生き方を社会に担保するための社会変革を志す実践であるという意味でラディカル・キャリア教育の文脈に位置付こう(4)。

IV. 研究の概要

研究は7月2日より開始した。トム氏より文献を送って頂き、8名の学習者がそれを分担して翻訳、分析をかけていくこととなった。分析したのは行政文書がメインだったため、英語の読解が極めて難しく、スムーズには進行しなかった。学習者とは長期休暇中はメールなどでやり取りをし、学期開始後は個々に進捗を確認し、2週間に一度ほど全員で進捗を報告しあった。同時に、報告書作成の際の記述方法(引用、脚注の付け方など)などの知識についても共有した。

資料の分析に当たっては、当然のことながらイギリス社会史に関する知識が必要となる。例えば、イギリス本体と北アイルランド、ウェールズ、スコットランドとの関係を分かっているなければならないし、また、イギリスにおける(法律も含む)性文化史を下敷きにしなければ適切な分析はできない。こうしたことから、主にイギリス社会史に関する学びも重視した。結果的に、イギリス社会史への理解は、本報告書の読者にも共通して求められることであると考へ、本来は執筆予定のなかったイギリス社会史に関する章の執筆へと繋がった。

トム氏は日本語で文章を書くことが出来るため、彼と我々の分担執筆形式の一つの報告書を作ることとした。10月の学業報告会期間を利用して執筆に入り、いくつかの章を完成した。我々が執筆した章は「本報告が社会システムに言及する理由」第一章「英国の現状」の全て、具体的には「報告対象の概念規定」「LGBTに関する社会史的概要」「イギリスの社会福祉政策」という部分と、第2章「イギリスにおけるLGBTの人々はどのような精神障害・精神疾患に苦しんでいるのか」における「摂食障害(神経性無食欲症を含む)」「不安感に基づく精神疾患(不安神経症・うつ病を含む)」、第3章「LGBTと行政システム」における「小括」及び「おわりに」の一部を執筆した。

V. 研究のその後

完成した報告書は原稿用紙換算で108枚の大部となった。執筆に当たっては、トム氏と我々以外にも、資料収集やデータチェックなどで多くの人々と協働作業を行った。また、報告書の発表場所の探索と発表のための手続きなども学習者の手によってなされた。

本研究の成果の一部は、2018年12月9日(日)に行われた日本キャリア教育学会第40回研究大会(於:早稲田大学)における特別企画シンポジウム「一人ひとりを大切に作るキャリア教育—キャリア教育はLGBTという生き方にどのように応接するのか—」(登壇者は宮台真司氏(首都大学東京)、三戸花菜子氏(特定非営利活動法人 ReBit)、村上裕氏(カウンセリングルーム P・M・R)、高野慎太郎)における討論のなかで発表された。また、本研究の成果の一部は『早稲田キャリア教育研究 Vol.10』(2019年3月刊行予定)に掲載される予定である。

社会の課題を発見し、実際に調査し、探求したものをまとめ、社会に発表し、様々な意見を受け、議論するというプロセスは、本学が求めてきた新社会を形成していく能力の育成という理念と大いに重なるものであろう。探求が重ねられることを願って、報告を終える。さいごに、貴重な研究の機会を与えてくださったトム・ペンゲリー氏をはじめ、報告の場を与えてくださった日本キャリア教育学会、早稲田キャリア教育研究会の皆様には厚く御礼を申し上げ、感謝する次第です。

参考文献

- (1)「熟議」については、キャス・サンスティーン『熟議が壊れるとき：民主政と憲法解釈の統治理論』(勁草書房, 2012年)を参照。
- (2)「プロダクティブ・ラーニング」についてはHeike Borkenhagenの諸論文を参照。
- (3)こうした論点について桑原隆『言語生活者を育てる—一言語生活論&ホール・ランゲージの地平』(東洋館出版社, 1996年)を参照。
- (4)「ラディカル・キャリア教育」について高野慎太郎「不登校と社会正義」(『早稲田大学教育学部報 111号』, 2016年)を参照。